「できない」ことが「できる」ようになる 過程についての質的研究

富永哲志¹⁾・豊田則成²⁾・福井邦宗²⁾

Qualitative Investigation of the Process of Ability Development in Performance

Satoshi Tominaga¹, Norishige Toyoda² and Kunimune Fukui²

Abstract

The objective of this study was to qualitatively examine and conceptualize a model of the development of ability in the performance process. This qualitative research study was based on the research question, “How do performers narrate the process when they develop the ability to do something?” Data were collected observations and introspective reports from 8 performers who had learned to juggling for the first time and were analyzed using the Trajectory Equifinality Model.

Results showed that performers slowly developed a sensuous understanding about the exercise task because they sought to perform better. Moreover, performers developed the ability to complete the task because of their improved sensuous understanding. That is to say, performers’ narration of the process of ability development reflects a qualitative shift resulting from an understanding of oneself through repeated “self-regulation” and “over-adjustment”.

The following three points are also discussed: 1) The knack of ability development in performance, 2) They were confronted with their personality implied at qualitative shift, 3) The meaning of “stagnant performance” during task achievement.

Key words: juggling, self-regulation, over-adjustment, trajectory equifinality model (TEM)

1) 大阪電気通信大学
〒575-0063 大阪府四條畷市清滝1130-7
2) びわこ成蹊スポーツ大学
〒520-0503 滋賀県大津市北比良1204
連絡先：富永哲志
E-mail: tooommmmy926@gmail.com

1) Osaka Electro-Communication University
1130-7 Kiyotaki, Shijonawate, Osaka 575-0063
2) Biwako Seikei Sport College
1204 Kitahira, Otsu-shi, Shiga 520-0503
Corresponding author: Satoshi Tominaga

1. 問題と目的

1) 本研究の関心事

本研究の関心事は、「できない」ことが「できる」ようになる過程について質的に検討することにある。「できない」ことが「できる」ようになる過程とは、人間が熟達をしていく過程として捉えることができる。熟達概念について大浦（1995）は、優れた仕事をする少数の特別な者を指すのではなく、熟達的前提とは「誰でも十分に練習をすればある程度の成果をあげることができ、練習を重ねることによって更に向上できる」ものと述べている。

「できない」ことが「できる」ようになる現象はスポーツの領域においても数多くみられる。例えば、試合で高いパフォーマンスを発揮するアスリートも、過酷な練習の中で数多くの「できない」ことが「できる」ようになる過程を体験してきている。また、アスリートに限らず、スポーツを親しむ者にとっても同様のことがいえる。このような過程の中で、個人の内面はどのような変化を遂げているのか、その個人の内的な構造を検討することは、スポーツ現場に対して有益な示唆を与えると考えられる。

2) 本研究の視点

個人の内的な構造を検討するためには、個人の体験の意味を問うような質的データの収集と分析に基づく仮説生成型の研究が適している。Uwe（2003）も、個の認識や関係の変化、それに関連したプロセスを扱う取り組みには従来の理論をベースにした仮説検証型の方法よりも、ボトムアップ的に仮説を構築していく仮説生成型のアプローチが適していると指摘している。そこで、本研究は「できない」ことが「できる」ようになる過程についての仮説生成を目指している。即ち、本研究の立場は仮説検証というよりは仮説生成という立場にある。本研究における仮説とは、西條（2007a；2007b）の提唱する構造構成主義の立場をもとに導き出されたものを意味する。構造構成主義とは、研究対象となる現象の構造を詳しく記述し図式化するこ

とによって現象の構造の可視化を試みる立場である。そこでは現象を詳細に捉えることができるような分厚い記述をした概念モデルを生成し、新たな知見を導き出すことを目指している。西條（2007）によると、分厚い記述とは「意味を浮かび上がらせるために必要な記述をする」ことである。そこでは、単に記述を積み重ねれば良いというわけではなく、意味を浮かび上がらせるような文脈を記述しなければならない。また、田中（2010）によると、本研究のような実践への質的アプローチによって導き出された概念モデルについて「自らの実践がどの位置にあるのかを相対化して捉える上で有効に機能する」とし、「わかりやすい形（図式）で提示することによって、現場が実践を理解する一助となりうる」と指摘している。また、豊田ほか（2013）も仮説生成型の研究において、「体験プロセス」の構造を詳細に記述し、「可視化」することは発展継承を可能とする有益な知見を導き出し、様々な議論を生み出す可能性を包含していると述べている。即ち、現象の構造を詳細に可視化した概念モデルを導き出すことで現場への有効な提言が可能となる。

本研究を進める上で「自己調整（Self Regulation：以下「SR」と称す）と「過剰適応（Over Adjustment：以下「OA」と称す）」の理論的枠組みについて整理する必要がある。まず「SR」についてであるが、崎浜（2000）によると「SR」とは、「目標に向けて自分自身の行動をモニターし、その結果によって行動をコントロールすることである」としている。更に、「SR」については「自己の要求や意志に基づいて自発的に行動を調整する能力」（Thorensen and Mahoney, 1974；伊藤ほか，1999）といった多様な定義がなされていることが指摘されている（Koop, 1982）。本研究で捉える「SR」とは、上記の崎浜（2000）の定義に近いといえる。即ち、「できない」ことが「できる」ようになる過程で生じると考えられる「SR」とは、「自分自身の行動を自身で調整していく作業」といえる。

一方で、北村（1965）によれば、そもそも

「適応」とは、「もともと社会的・文化的環境への適応を表す外的適応と、心理的な安定や満足といった適応を表す内的適応のバランスがとれた状態を指す」としている。また、澤田・古畑(1978)によると、「適応」とは、「個体と環境の間の心理的調和関係である」としている。「できない」ことが「できる」ようになる過程とは、課題に対して「適応」していく過程ともいえる。上記の理論に追随するのであれば、本研究で捉える「適応」とは、『「外的適応」と「内的適応」のバランスがとれた状態であり、心理的調和が保たれている状態』といえる。そして、「OA」の概念については一律の定義がなされていない(浅井, 2012)が、石津・安保(2008)は、階層的因子分析によって、「OA」の概念構造が「外的適応の過剰さ」と「内的適応の低下」に相当する2つの因子に大別できることを実証的に明らかにした。即ち、「OA」とは、『「外的適応」と「内的適応」のバランスが崩れた状態であり、心理的調和が保たれていない状態』といえる。

3) 先行研究の整理

これまでに「できない」ことが「できる」ようになる過程に関連する研究の中で質的に検討しているものは希少であると言わざるを得ない。その中であって次に述べる研究は示唆に富んでいる。まず會田(2008)や會田ほか(2008)は、国際レベルで活躍したハンドボール選手における実践知の獲得過程について質的分析をおこなっている。そこでは、シュート局面における動きのコツに関する語りを検討しているが、導き出された知見が事例報告の範囲に留まってしまっているため、内的な構造を可視化した概念モデルの提示にまでは論が至っていないという限界点を指摘することができる。次に浅野・中込(2014)は、アスリートのコツ獲得プロセスに着目をし、競技への取り組み方やパフォーマンスの変化(外的変容)と、それに伴う意識や認知の変化(内的変容)の二側面からコツ獲得に至るプロセスをモデル化し、コツ獲得経験に伴う心理変容の特徴について検討している。

そこではアスリートがコツを掴む過程という現象を研究対象としており、「できない」ことが「できる」ようになる過程という現象については検討の余地があるといえる。一方、北村(2003)のスポーツ・音楽・芸術領域における「わざ」習得過程に関連する報告や永山ほか(2010)の動作のコツ習得過程における身体知の働きの報告から導き出された概念モデルについては現象の構造を詳しく説明する際に必要なカテゴリー間の説明がなされておらず、あまりにも抽象的で現象を詳しく捉えきれていない。即ち、導き出された概念モデルが非常に曖昧であり、現場への有効な提言を為すことについては疑問が残ると言わざるを得ない。

4) 本研究の目的

上述してきたように、「できない」ことが「できる」ようになる過程について構造構成主義の立場から発展継承可能な仮説生成を目指す質的なアプローチを行う意義や、既存の質的に検討を行っている先行研究の問題点を踏まえた上で、「できない」ことが「できる」ようになる過程を可視化し検討することを通して、現場への有効な提言を為すことが可能となる。従って本研究は、「できないことができるようになることをどう語るのか」というリサーチ・クエスチョン(Research Question: 以下RQ)を設定し、質的研究法を用いて検討した。そこでは「できない」ことが「できる」ようになる過程について概念モデルを提示することを目的とし、発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出すことを目指した。西條(2002; 2007)は、質的研究において「先行研究を引き継ぐことを担保するための方法概念が必要」と述べ、「研究対象とする現象に応じて、仮説をより細分化・精緻化していく従来の検証的方向性と、記述や解釈の多様性を拡大する発展的方向性の、双方を柔軟に追求可能な枠組み」として、「継承」という「発展と精緻化の双方を包含する概念」について述べている。即ち、具体的な結果として導き出された概念モデルの抽象度が、現象を捉えるための質の伴った説明率の高い表現であ

るか否かが問われる。また、概念モデルを基に導き出された仮説的知見を、現場に還元することができるか否かについても求められる。そのためには、上述したように意味を浮かび上がらせるような分厚い記述をする必要があり、現場が実践を理解する一助となるような分かりやすい図を提示する必要がある。

2. 方 法

1) 情報提供者と運動課題

情報提供者 (Informant: 以下Inf.) は、ボールジャグリング運動 (以下ジャグリング)¹⁾ を経験したことがない者11名 (19歳-28歳, 男性5名, 女性6名) であった。本研究は、「できない」ことが「できる」ようになる過程を観察するものであるため、運動課題に対して初学者であるInf. が求められる。そのため、Inf. の選定条件として性別、年齢及び運動歴といったものは一切考慮せずに、「ジャグリングを経験したことが無い」という条件を満たす者をInf. として選定した。Inf. の選定の際には、本研究の趣旨を説明した後、実際にジャグリングを実施させた結果、ジャグリングが「できない」ことを研究実施者である著者が確認した上で研究協力の承諾を得た。

近年、ジャグリングを研究対象とする研究が多くみられる (橋詰・松尾, 1998; Scholz, Jan, et al. 2009; 波多野ほか, 2012)。本研究ではジャグリングの中でも代表的な「カスケード (3つのボールで行うジャグリング) を100回連続でキャッチする」という運動課題を設定した。先行研究によるとカスケードの学習過程は3段階に区別可能で (Beek and van Santvoord, 1992), 3段階 (上級者レベル) の目安となる数値が連続キャッチ100回だとされている (Hashizume and Matsuo, 2004) ため、本研究の「できない」ことが「できる」ようになったという1つの目安となると判断し運動課題として設定した。なおキャッチの回数については「1個のボールを投げてキャッチする」を1回としてカウントした。

2) 観察概要

ジャグリングが「できない」状態から「できる」状態へ推移する過程をVTRで撮影し、観察記録を作成した。具体的にはInf. の正面に三脚を付したビデオカメラをInf. の全身が映るよう設置し、試技の様子を撮影した。観察者 (著者) は、ビデオカメラの左側に机と椅子を設置し、練習の様子を観察しながら試技の際の発話を中心に記録し、観察記録を作成した。練習中は観察者 (著者) から話しかけることはせずにInf. からの質問がある場合、それに応じて返答するようにした。Inf. 自身の内的作業を促進するため、Inf. からの質問に対しては必要最低限の情報提供に留めることを心がけた²⁾。また、毎回の練習直後に半構造化面接 (インタビュー)³⁾ をおこない、得られた内省報告を観察記録と併せて発話データと位置づけ、内的変化を捉えようと試みた。

半構造化面接 (インタビュー) とは、特定の話題についての信念をより詳細に把握し、その話題に関する語りに迫ろうとする際に用いられる (Smith, 1995) 面接法であり、面接に先立ち必ず質問をする質問項目を盛り込んだガイドを準備して面接を行う手法である。即ち、質問項目についてはあらかじめ構造化されているが、語り手は質問項目に対して自由に語ることができるという手法である。また、本研究は大学の規定する倫理委員会の審査を通過した上でを行い、Inf. のプライバシー保護に努めるため、毎回の観察はジャグリングが十分に実施でき、なおかつ著者とInf. が1対1の状況になれる個室を利用して行われた。観察は20XX年1月から8月まで実施した。

3) 分析対象の選定

Inf. 11名のうち最終的に8名 (19歳-28歳, 男性4名, 女性4名) を本研究の分析対象として扱った。これは歴史的構造化サンプリング (Valsiner and Sato, 2006; 安田・サトウ, 2012) と関心相関的サンプリング (西條, 2007) に依拠するものである。歴史的構造化サンプリングとは人の経験は歴史的・文化的・社会的な文脈

に埋め込まれ構成されているという認識の下、同じ経験をした人を選定するサンプリング方法である。ここでの「同じ経験をした人」とは「同じような経験をした人」という意味である。荒川ほか（2012）によると、ここで同一の経験はあり得ないとも考えることも可能であるが、理論上・実践上の緩やかな同一性を設定することでその経験の多様性の幅が捉えられ、研究知見に意味を持たせることができると述べている。

また、関心相関的サンプリングとは、「自分の関心（リサーチクエスション）に照らして、（相関的に）対象者をサンプリングする」ものであり、自分の関心を基準として研究目的に合った人を選ぶサンプリングのことである。即ち、本研究では、「できないことができるようになることをどのように語るのか」というRQの問いに対する答えを持つInf. を分析対象として選定を行った。その結果、連続キャッチ100回を達成していなくても本研究者が練習の観察と内省報告を繰り返していく中で質的なシフト（「できない」ことが「できる」ようになった経験をした）が生じていると判断したInf. 8名を分析対象とした。

4）分析方法

本研究では、質的研究法の中でも時間を捨象することなく多様な経験の径路を提示するという理念を基盤とした複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model：以下TEM）の手法を参考に分析を行った。TEMとは、人間の経験を時間的変化と社会的・文化的な文脈との関係で捉え、その多様な径路を分析及び記述するための方法論的枠組みである（サトウほか、2006）。

TEMの根本的な概念である「非可逆的時間」とは、順次的な時系列の経過を意味している。そのような「外的な時間（順次的な時間）」を重視することで、「できない」ことが「できる」ようになる過程の可視化を時系列の経過に沿ったプロセスとして提示することができる。本研究では、「できない」ことが「できる」ように

なる過程の観察記録と内省報告から、概念モデルを導き出すことを目的とした。そこでは、対象者の内的な時間（心理的な時間：Psychological time）ではなくて、外的な時間（順次的な時間：Chronological time）に着目して分析を進めることが求められる。そのため、非可逆的時間を軸に個人の体験を個別に扱いつつ個人間の共通性や差異を分析することができるTEMを分析方法として採用した。表1にTEMで使用する用語の解説と本研究における位置づけを示す。

5）分析手順

以下のような①から④の手順によって質的な分析を行った。まず①観察記録と内省報告の内容を逐語録として起こし発話データとした。次に②データを精読した後、各Inf. の事例ごとに川喜田（1967）のKJ法に準じて、意味のあるまとまりごとの単位に切片化し、その内容を端的に表す見出しをつけ、付箋に記載しコードとした。そして③意味が類似したコードを集めカテゴリーとし、時系列の経過に沿って並べ、各Inf. の事例ごとのTEM図を作成した。最後に④①から③の作業を8名分行い、各Inf. のTEM図を比較・検討し、共通するカテゴリーをまとめて抽象度を高めたカテゴリー・グループ（Category Group：以下CG）を生成し、それらのCGから更に抽象度を高めたコア・カテゴリー（Core Category：以下CC）を生成し、8名分のTEM図を統合した包括的なTEM図を作成した。

包括的なTEM図作成については3つの分析手続きを踏んでいる。そこでは、①CGの生成、②CGの修正、③CGの飽和といった導き出されたCGが理論的飽和に至るまでの手続きを踏んでいる。即ち、「データ収集＋分析」の1セットを1つの段階（西ほか、2012）とすると、本研究は全体で3つの段階（①CGの生成で3名、②CGの修正で3名、③CGの飽和で2名）から成っている。なお、これらの分析についても、面接を行った著者が引き続き実施した。

6) 解釈の枠組み

本研究は、構造構成主義の立場から「できない」ことが「できる」ようになる現象をTEMという手法を用いて詳しく記述していき、「選択肢の連続体」としての説明をしていく。そこでは、観察記録と内省報告を基にInf. が、どのような選択肢を選び取っていったのかといった観察者の解釈を問主観的な視点からカテゴリー化している。質的研究では、著者の関心、視点、問い、データの収集・分析方法、ならびに解釈の基準や枠組みを研究の中に具体的に提示し、研究方法の確実性を確保する必要がある(渡邊, 2004)。更に、研究結果が現実の姿を反映していることを示すためには、他の研究者による研究結果や対象に対する解釈の受容・納得が必要であるため(渡邊, 2004)、TEM図作成に関しては、スポーツ心理学及び質的心理学に精通している3名の教員による指導に加えて、

本研究の分析方法であるTEMの手法に精通している1名の教員からスーパーバイズを受けることによって、妥当性を高め、恣意的な解釈を可能な限り排除し、かつ、正確に現象の構造を捉えることを心がけた。

質的研究法による分析は研究者の思考を通したデータの翻訳作業といえ(佐藤, 2008)、分析者の枠組みが分析結果に直接影響する(田中, 2010)。そこでは、分析者の恣意的な解釈に偏る危険も危惧しなければならない。それを防ぐためにTEMの手法を参考に分析を行う上で、トライアングレーションを重ねながら、個々のデータの十分な検討を行った。廣瀬(2012)によると、筒井ほか(2005)はDenzin(1978)やKimchiほか(1991)、Burns and Grove(2001)の記述に基づき、理論的、データ、方法論的、調査者、分析の5種類のトライアングレーションを定義している。その中でも本

表1 TEM図の用語の説明と本研究における位置づけ

概念	説明	本研究における位置づけ
等至点 :EFP(Equifinality Point)	多様な経験の経路が一旦収束する地点	達成
		成功体験
		失敗体験
		構造が分らない
		1投目を投げる
		否定的に捉える
		構造の模索
		課題に気づく
		疑問が残る
		少し理解が進む
		変化の実感
		楽しい
		意欲の向上
		内的な基準の模索
必須通過点 :OPP(Obligatory Passage Point)	論理的・制度的・習慣的に、対象となる人のほとんどが経験せざるを得ない地点	内的な基準に触れる
		内的な基準の残存
		新たな課題に気づく
		自分で限界を作る
		内的な基準の探索
		内的な基準を見失う
		納得しない
		ミスを立て直せる
		内的な基準の確立
		悔しい
社会的ガイド :SG(Social Guidance)	等至点への選択を援助する社会的勢力	語れない何かがある
		教示

研究は、理論的トライアングレーションを採用した。即ち、「多元的な視点と仮説を念頭に、データにアプローチすること」がその出発点であり、「多様な理論的観点が、それらの有用性と力とを吟味するために並列される」(Denzin, 1989b) 理論的トライアングレーションを、上述したTEM図作成の際に著者以外の4名の教員と行った。本研究で実施したトライアングレーションは、質的研究と量的研究を組み合わせるという視点ではなく、あくまでも分析の結果が恣意的な解釈に偏ることを防ぐために、著者を含めた5名の研究者が議論を交わす理論的トライアングレーションを実施した。

3. 結 果

1) 概念モデルの生成

分析の結果、最終的に28個のCGを導き出し、5個のCCを生成するに至った。最終的に生成されたカテゴリーの詳細については表2に示す。以下にそれらのCG、CCから導き出された概念モデル(図1)について解説をしている。なお文中の「」は、実際のデータからの引用部分を表しており個人が特定されないように、意味内容に注意を払いながら若干の加工を加えている。

図1は、『「できない」ことが「できる」ようになるプロセス』と名付けた。図1の縦の三層のそれぞれの位置づけとして、まず上・下層の「自己との対話」は、それぞれ成功体験・失敗体験を通じての自己との対話を意味している。そこでは、成功・失敗体験や「自己調整」や「過剰適応」を繰り返す中でのInf.の内的な対話を表している。即ち、自身のジャグリングの実感を確かめているという意味を表す。また、中央層の「ジャグリングへの適応」は、Inf.のジャグリングに対する適応を表している。即ち、成功回数といった「外的適応」と、実感といった「内的適応」のバランスがとれた状態であり、心理的調和が保たれている状態を意味する。そして、左から右へ流れる非可逆的時間という時間軸を基に、発話データから得られた経

路を実線で描いている。図1は主に必須通過点(Obligatory Passage Point: 以下OPP)のCGの動きを表している。他にもTEMには分岐点(Birfication Point)や破線(語りからは得られなかったが理論的に存在する経路または選択)といった多様性を表す概念が存在するが、本論では、あえて複線経路の多様性に関する部分を記載していない。即ち、図1では誰もが共通して通るOPPの経路のみを記載した概念モデルを提示している。図1のようにOPPのみの経路を提示することによって、導き出された仮説的知見を明確に概念モデルの中に示すことが可能になると判断したためである。

「できない」ことが「できる」ようになる過程の中でInf.は「自己調整(Self Regulation: 以下SR)」と「過剰適応(Over Adjustment: 以下OA)」の繰り返しという質的な課題のシフトを体験していることを読み取ることができた。図1の丸い長方形のCGは「SR」、四角い長方形のCGは「OA」を表している。以下にその詳細について述べていく。

2) 「できない」ことが「できる」ようになる過程における自己調整(Self Regulation)

「できない」ことが「できる」ようになる過程でInf.は成功体験と失敗体験をしていく中で試行錯誤を繰り返している。例えば、「左…いや…右から2個で始めてたんですけど左からの方が次は入れ替える時利き手やからやりやすいかも」のように、そこでは絶えず自己との対話を繰り返しており、自分自身の行動を調整することでジャグリングを遂行しようとしている。即ち、ジャグリングへの適応に向けて「SR」しているといえる。

Koop (1982)によると「SR」とは、「目標に向けて自分自身の行動をモニターし、その結果によって行動をコントロールすること」(崎浜, 2000)や「自己の要求や意志に基づいて自発的に行動を調整する能力」(Thorensen and Mahoney, 1974; 伊藤ほか, 1999)といったように多様な定義がなされている。また、北村(1965)によれば、「適応」とは、もともと社会

表2 最終的に生成されたカテゴリー表

コア・カテゴリー	カテゴリーグループ	説明	具体的な逐語データ
CC1 できない	CG1 構造が分からない	当初はジャグリングの構造自体が分からなかったなどを語っていた。	「どうやるんやろ…分からへん…どっからですか」
	CG2 1投目を投げる	まずは1投目を投げてみたなどを語っていた。	「まず投げてみて」
	CG3 否定的に捉える	ジャグリングができないことに対して否定的に捉えていたことなどを語っていた。	「あ〜イライラする…あ〜難しい」
CC2 成果を求めて模索する	CG4 教示	正しいカスケードの教示を受けた	「(カスケードの教示を受ける)」
	CG5 構造の模索	ジャグリングの構造や自分の動きを模索していたなどを語っていた。	「2個持つての方を投げてその間に…あ、この間にか」
	CG6 課題に気づく	自分の課題に気づいたなどを語っていた。	「うわー違う違う、ほらほらこいつこいつ今のやねん、今の、今のがさっきのいったあかんとこいつるってやつ」
	CG7 疑問が残る	何回かできたがその理由が分からなかったなどを語っていた。	「え?さっきなんでできたんやろ」
	CG8 少し理解が進む	少しだけ理解が進んできたなどを語っていた。	「だいたいどういう体勢でやったらいいかっていうのが分かったのと、頭で考えるよりまず身体でやらないと分かんないんだなって」
	CG9 変化の実感	自分自身の動きが変わってきたなどを語っていた。	「ちよつとこう…キャッチができるようになってきた、ボールを落とすってことがなくなってきた」
	CG10 楽しい	ジャグリングに対して楽しさを覚えるようになったことなどを語っていた。	「お〜ほほ〜なんかちよつと楽しくなってきた」
	CG11 意欲の向上	次第にジャグリングをやりたいと思うようになっていったなどを語っていた。	「ちよつとできるようになりたいな〜と思って…やるからにはね、できるようにになりたいんで」
	CG12 内的な基準の模索	やりやすい方法を探していたなどを語っていた。	「なんか〜気づいたらちよつと低いかな〜と思ったんで、高く上げてちよつと間隔に余裕があったら投げやすいかな〜と思ったりして」
	CG13 内的な基準に触れる	自分が1番やりやすい感じで投げることができたなどを語っていた。	「だいふなんていうんすかね…自分のやりやすい感じが分かってきたとか…そんな感じですよ」
	CG14 内的な基準の残存	ミスした理由として内的な基準から外れていたことなどを語っていた。	「続くなって…あ、これいけそうっていう…まあその良い時の感覚を覚えてるのかね〜こう偶然的に…上手くいった時の」
	CG15 新たな課題に気づく	今までとは違う新たな課題に直面していることなどを語っていた。	「もう全然安定しない…なんか違うとこ飛んでいきます全部」
CC3 感覚的に理解する	CG16 自分で限界を作る	変に意識してしまって失敗してしまうことなどを語っていた。	「じゃあ限界決めちゃってるんですかね」
	CG17 内的な基準の探索	今まで出合った内的な基準を探すことなどを語っていた。	「グチャグチャですボールの投げる位置が…ん〜ポイント絞ったら良いんですね」
	CG18 内的な基準を見失う	今まで出合った内的な基準を見失っていることなどを語っていた。	「何がやりやすいのか分かんなくなってきました」
	CG19 納得しない	回数ができても自分の中で納得がいけないことなどを語っていた。	「今のもまたなんかちやうねんな…19回ってんのに」
	CG20 ミスを立て直せる	ミスをしそうになっても修正がきくようになったことなどを語っていた。	「ボールが違うとこに飛んでいても、そこまで自分がこう動いて行って、で、取りに行くみたいいな…で、立て直しがきくようにはなりました」
CC5 できる	CG21 内的な基準の確立	自分の中で内的な基準を確立したことなどを語っていた。	「多分もうこれが基準に…基準というか…調子良い悪いの良い時がこんな感じなんかっていう」
	CG22 成長の実感	自分が成長していることを感じていたことなどを語っていた。	「上手くはまりましたね〜初めの9回からにしたら10倍以上」
	CG23 悔しい	課題達成できない悔しさを抱くようになったことなどを語っていた。	「うわ…悔しい…惜しいですね…さっきから」
	CG24 確固たる自信	ジャグリングに対して強い自信を抱くようになったことなどを語っていた。	「もう今日100回はいけるなっていう余裕があったんで」
	CG25 語れない何かがある	できた要因についてはっきりと語ることができないことなどを語っていた。	「え?…何考えてやってたかな〜あ〜え〜え〜…コツ…ん?…で言われたら出てこないですね私」
	CG26 達成	ジャグリング課題を達成したことなどを語っていた。	「はい…やっとなりました」
	CG27 成功体験	成功したことなどを語っていた。	そういう意味でちよつと落ち着いてできて、で、普通に10回も難なく超えてってって感じで…できました
CC1-CC5に共通する等至点	CG28 失敗体験	失敗したことなどを語っていた。	なんか上げられてもキャッチに至れないっていう

図1 「できない」ことが「できる」ようになるプロセス

的・文化的環境への適応を表す「外的適応」と、心理的な安定や満足といった適応を表す「内的適応」のバランスがとれた状態を指すとしている。

本研究に置き換えるならば、「外的適応」と「内的適応」が適度にバランスの取れた状態とは、立ち現われるジャグリングの成功回数に対してInf.の実感がしっかりと伴っていることを意味する。Inf.は「SR」することでジャグリングができるという実感を得ようとしているといえる。以上のことから本研究で捉える「SR」とは、「運動に対する自分の適応範囲を自身で調整して定めていく」と集約することができる。

3) 「できない」ことが「できる」ようになる過程における過剰適応 (Over Adjustment)

Inf. がジャグリングへの適応を試みる際には

「SR」をして得られたジャグリングができるという実感を放棄しなければならない。例えば、「いやなんかここら辺でやってる感じだったんですけど、それをもうこういう感じにしたらなんか…分かんないですけどなんか出しやすくなりましたボールが」のように、今まで「SR」して得てきた実感を思い切って放棄することによって、新たな実感を得ていることを読み取ることができる。即ち、「SR」して得てきたジャグリングに対する自分の適応範囲を過剰に越える「OA」を体験していることを読み取ることができた。

「OA」についての研究のレビューを行っている浅井 (2012) によると、「OA」の概念については一律の定義がなされていないが、石津・安保 (2008) は、階層的因子分析によって、「OA」の概念構造が「外的適応の過剰さ」と「内的適応の低下」に相当する2つの因子に大別できる

ことを実証的に明らかにした。即ち、「OA」とは、「外的適応」と「内的適応」のバランスが崩れた状態といえる。

本研究における「外的適応の過剰さ」とは、ジャグリングの成功回数の大幅な変動を意味し、「内的適応の低下」とは、ジャグリング遂行においてInf. 自身の実感が伴われていないことを意味する。「OA」が起こり成果と実感の間にズレが生まれることによって、そのズレを埋めるために「SR」していくといえる。以上のことから、本研究で捉える「OA」とは、「運動に対する自分の適応範囲を過剰に越える、または越えてしまう」と集約することができる。

4) 「自己調整」と「過剰適応」の繰り返しという質的な課題のシフト

「できない」ことが「できる」ようになる過程の中で、Inf. は「SR」と「OA」の繰り返しという質的な課題のシフトを体験していることを読み取ることができた。即ち、「できない」ことが「できる」ようになる過程とは「SR」と「OA」の連続体で構成されているといえる。

「SR」と「OA」の繰り返しとは、図1を略式化した図2に示しているように「SR」を表

す起伏的な矢印が4回、「OA」を表す直線的な矢印が3回それぞれ生じていることを意味している。そこでは「SR」と「OA」という同じ言葉で表記をしているが、その1つ1つの質は全く異なっていることを表している。即ち、「SR」と「OA」が交互に繰り返されている中で、質的な課題のシフトが起こっていることを意味している。Inf. は、「SR」して得られたジャグリングができる実感を「OA」によって放棄しては、「OA」した分の適応範囲の実感を得るために再び「SR」していくという「SR」と「OA」の繰り返しの体験し、徐々にジャグリングへの適応範囲を自分自身で定めていくといえる。即ち、「SR」と「OA」は相補的な関係にあるといえる。そこでは「SR」を4回、「OA」を3回体験しているが、それらの1つ1つの質は時間の経過を追うごとに全く異なるものになっている。

図2ではInf. は、「自己との対話」と「ジャグリングへの適応」を交互に行うことでジャグリングに対する適応範囲の調整を行っているため、「SR」は起伏的な矢印で表現している。また、「ジャグリングへの適応」の範囲を「SR」していく中で、「ジャグリングへの適応」層を

図2 「できない」ことが「できる」ようになるプロセスの略式図

超える「OA」が生じていることを直線的な矢印で表現している。そして、非可逆的時間の経過につれて「ジャグリングへの適応」範囲が定まってきていることを「OA」を示す直線の矢印の長さが徐々に短くなっていることで表しており、Inf. が体験するジャグリングの質が高くなり、ジャグリングが「できる」ようになる過程を表している。従って、図2は本研究の仮説的知見が集約されている図であるといえる。

これらのことから「できない」ことが「できる」ようになる過程とは、「SRとOAの繰り返し」という質的な課題のシフトを体験する過程」と換言することができる。

5) RQに対する仮説的知見

以上のことから、本研究の「できないことができるようになることをどう語るのか」というRQに対して、「運動課題ができない状態から、成果を求めて模索していく中で、徐々に運動課題に対して感覚的に理解をしていく。そして、感覚的理解を深めていくことによって運動課題ができるようになる。即ち、できないことができるようになる過程を自己調整と過剰適応の繰り返し」という質的な課題のシフトとして語る」という仮説的知見を導き出した。

4. 考 察

本研究については、様々な視点から検討することが可能であるが、ここでは以下の3点について考察を述べていく。なお文中の【 】はCGを、〈 〉はCCを表している。

1) 「できない」ことが「できる」ようになるときの「コツ」

本研究は、「できない」ことが「できる」ようになる過程について概念モデルを提示した。そこでは「できない」ことが「できる」ようになるときの「コツ」を読み取ることもできる。即ち、「できない」ことが「できる」ようになるときの「コツ」とは、【CG21内的な基準の確立】【CG22成長の実感】【CG24確固たる自信】【CG25語れない何かがある】の4個のCGから

構成されている。

実際に、「いやなんか10分までに80回しますって言って投げた瞬間に軸ができたんですよ」の語りから【CG21内的な基準の確立】を、「やっぱ練習したらできるもんなんですね何でもって思います…だって練習できたらこんなにできるようなんですね…だって私6回もできなかったんですよ」の語りから【CG22成長の実感】を、「なんか～もう…できるって思ってます…自分でも思ってるしちゃんと身体もついてくるしみたいな…もう身体と気持ちが合ってるんで～もうできます」の語りから【CG24確固たる自信】を、「え？…何考えてやってたかな～…コツ…ん？…て言われたら出てこないですね私」の語りから【CG25語れない何かがある】を生成した。本研究における「できない」ことが「できる」ようになる「コツ」とは、「課題遂行において自身が最もやりやすいと感じる内的な基準と運動課題が遂行できるという成長の実感を伴った確固たる自信を得た上での語れない何か」といえる。即ち、「自己調整できる実感や手応えである」と集約できる。

図1にある〈CC3感覚的に理解する〉〈CC4感覚的理解を深める〉についてはジャグリングに対して頭で理解しているのではなく、身体の中にある実感や感覚を頼りにジャグリングへの理解をしているという意味になる。「SR」と「OA」の繰り返しという質的な課題のシフトを体験している中で、頭ではなく身体の中にできる実感や感覚を通してジャグリングへの適応を試みているといえる。その結果として、Inf. は、〈CC5できる〉の段階でInf. 自身の内側にジャグリングが最もやりやすいと感じる【CG21内的な基準の確立】が起きていることを語っているといえる。

2) 質的な課題のシフトに包含される自己のパーソナリティとの直面化

本研究から「できない」ことが「できる」ようになる過程における質的な課題のシフトの中に自己のパーソナリティに直面化している側面

を読み取ることができる。例えば、「アハハ…何これ…なんでジャグリングできないだけでこんな悩まないとダメなんですか？」や「くそ…あー！えー！無理！嫌！ちょっともう…根気のない19歳には無理や」といった、ジャグリングが「できない」ということを通じて自己のパーソナリティと向き合っているかのような語りがみられた。Nakagomi and Kotani (2009) は、元オリンピックを対象として面接調査を行い、動きのコツにつながるような課題の自覚と課題解決に向けた取り組みには、彼らの競技ヒストリーにおいて内的必然性が認められ、コツ獲得はパフォーマンス向上だけでなく人格発達においても大きな影響を持つと主張している。

このような視点に立つと「できない」ことが「できる」ようになる過程は課題克服体験プロセスと換言することができる。即ち、「やっぱ諦め癖あるなって思いました、私自分自身…これはこの諦め癖をどうにかしないと多分一生できないんで…ちょっとそれを治すためにジャグリングやりたい」と語るように、「SR」と「OA」を繰り返すことは自己と向き合い続け、新たな自己を開拓し続けることと換言することもできる。そのような経験があるからこそ内的な基準や実感を伴った確固たる自信を確かなものとして得ていくのではないだろうか。図1の<CC1できない>段階にいる時のInf. は「全くできる気がしない」といったジャグリングに対して【CG3否定的に捉える】語りを語っていたが、<CC5できる>段階まで変容した時のInf. は「いやでも続くっていうのは自信ついたんでね」や「もう100回できます」といったジャグリングに対して見違える程の【CG24確固たる自信】について語るようになっていた。また、課題達成に至ったInf. の「超人になった気分です…え、スゲー！みたいな…やっぱやったらできるんだなって思いました」といった語りからも、自己のパーソナリティと直面化したからこそ得られる成長の実感や自信を読み取ることができる。

3) 「できない」ことが「できる」ようになる過程における「停滞」の意味

運動課題が、ある程度遂行できるようになると、「できるはずなのにできない」という成果が停滞する期間に陥ることがある。このような「停滞」の期間は消極的に捉えられがちであるが、むしろ積極的な意味を含んでいる可能性があるといえる。運動課題達成に至る上で、「停滞」の経験は避けては通れない。そこでは、いわゆる退行が起きているのではなくて、質的な課題のシフトの途中であることを読み取ることができる。例えば、「これできない時や…高過ぎる時はできない時」のように感覚的に理解を深めている機会と捉えることもできるし、「もう今話してて多分気持ちが先走ると駄目ですね…だからちゃんと現状をもっとちゃんと分かって…うん…ちょっと50回いけるかもしれないですとかじゃなくて…ちゃんと現状を分かった上でちょっとずつやったら多分…できるようになると思うんですけどね」のように、上述した自己のパーソナリティと直面化している機会と捉えることもできる。

運動課題遂行の途中で運動実施者は、「さっきできたのに」といった実感と成果の間にズレを生み出す。そのような「停滞」はいわば、実感を得る為に必要な時期ともいえる。即ち、「停滞」とは、「できない」ことが「できる」ようになる過程の中で、むしろ積極的な意味合いを有するものとして捉えられるべきであり、この意味ある「停滞」に直面化し克服していくことにこそ、自己のパーソナリティとの直面化を認めざるを得ない。達成困難を伴う運動課題に取り組む過程といった主観的な領域のみならず、個人のパーソナリティ発達までを期待できる視点は運動遂行における全人格的側面への寄与を肯定するものであり、多くの可能性へを発展することも期待させる知見であるともいえる。

5. まとめ

1) 本研究の概観

本研究は、「できないことができるようにな

ることをどう語るのか」というRQに対して質的研究法を用いて検討した結果、「運動課題ができない状態から、成果を求めて模索していく中で、徐々に運動課題に対して感覚的に理解をしていく。そして、感覚的理解を深めていくことによって運動課題ができるようになる。即ち、できないことができるようになる過程を自己調整と過剰適応の繰り返しという質的な課題のシフトとして語る」という仮説的知見を導き出した。そこでは、運動課題遂行を通じて「できない」ことが「できる」ようになるときの「コツ」を獲得することや、「停滞」を通じて自己のパーソナリティに直面化するという自分自身に対する「自己理解」を深めていることが示唆された。即ち、「できない」ことが「できる」ようになる過程とは「SRとOAを繰り返すことによって自己理解を深めていく過程」として捉えることができる。

2) 本研究の仮説的知見と先行研究との対比

以下では、本研究において導き出された知見と先行研究で指摘した問題点を対比してみる。まず、會田（2008）や會田ほか（2008）の研究の実践知の獲得過程における内的な構造を可視化した概念モデルの提示をすることについては図1を提示したことで補完できたと考える。そこでは「できない」ことが「できる」ようになる過程を表した5つのCCや「できない」ことが「できる」ようになるときの「コツ」を構成する4つのCGを導き出すことによって現象の構造を詳細に可視化することができた。

次に、浅野・中込（2014）の「できない」ことが「できる」ようになる過程といったローパフォーマンスな現象について検討の余地があるといった視点の移動については、本研究の運動課題の難易度やInf.の選定の面から補完できたと考える。本研究の運動課題として取り扱ったジャグリングは、トップアスリートに限らず、全ての人に学習可能な運動課題といえる。また、本研究のInf.も「ジャグリングを経験したことがない者」という全くの初学者を対象としているため、そのような初学者が「できない」

ことが「できる」ようになる過程を検討することができた。

そして、北村（2003）や永山ほか（2010）の非常に曖昧な概念モデルによる現場への有効な提言についての疑問も、本研究において抽象度の精度を高めた概念モデル（図1・図2）を導き出したことから下記の2点を現場への提言として示すことが可能となる。まず①学習者は「できない」ことが「できる」ようになる過程において「SR」にのみ焦点を置くのではなく、時には自分の適応範囲外に勇気を持って飛び込み課題にチャレンジする「OA」についても重視する姿勢が求められる。「できない」ことが「できる」ようになる過程とは「SR」と「OA」の連続体で構成されていることは繰り返し述べてきた。そこでは自身の内側にできる内的な基準を重視する姿勢も求められる。次に②指導者は運動遂行における「停滞」に対して積極的意味をもつことにより、運動遂行に対する本質的で了解的なアプローチが可能となる。学習者は運動課題が「できない」という困難さに立ち向かうことによって運動課題の達成もさることながら自己の成長、成熟を期待することができる。指導者は目の前にいる学習者が対峙している「停滞」の意味を読み取る姿勢が求められるといえる。これらのことを踏まえて以下に本研究の課題と展望について述べる。

3) 本研究の課題と今後の展望

本研究は、ジャグリングという「できない」ことが「できる」ようになるという範囲の下で得られた結果となっている。それに加えて本研究から得られた結果及び考察はあくまでも本研究である著者自身による解釈の範囲の上で行われているものである。即ち、本研究は一つの作業仮説を導き出したに過ぎない。また、本論では、上述した現場への提言が妥当であるか否かの確認については今後の課題として残してしまっている。今後は、本研究の成果を援用しつつ、著者自身が「自己調整」と「過剰適応」の概念の理論的飽和に向けて研究を継続したい。

また、本研究において「コツ」は「共働生

産」される可能性を読み取ることができた。「できない」ことが「できる」ようになる過程を通じて「自己理解の深化」と「コツ獲得」の共時性を読み取ることができた。ここから、他者と共に「できない」ことが「できる」ようになる共働過程を体験することによって、「コツ」を共有する可能性に加えて、「他者理解」や「相互理解」を図ることができるようになる可能性が示唆された。そのような視点に立つと、極めて主観的な性質をもつ「コツ」は共有することができるのかもしれない。即ち、個人内で起こっていた「自己理解の深化」と「コツ獲得」の共時性が個人間で起こる可能性について検討していくことが求められる。

注

- 注1) ジャグリングを種目として設定した理由については田中・小河原(2010)の以下の2点を参考にした。①ジャグリングは一見したところ動作が複雑であり、動作の全般的なパターンを認知できても、動作手順や運動構造を細部まで理解するのは難しい。未経験者にとって、動作全体を秩序づけて言語化するのは容易ではない。②ジャグリングは、技能の習得に際して、筋力や持久力といったエネルギー的体力の優劣に左右されにくい、特定の運動経験を持つ者でなくても、それを学習できる可能性に開かれている。
- 注2) 具体的には初期の投げ方が分からない場合、Inf.から質問があれば、「ボールを2つ持っている方の1つを投げ、そのボールを逆の手で取る」という投げる順番のみの指導に留めることで、Inf.自身に考える機会を設けることを心がけた。
- 注3) 代表的な質問項目については以下に示す通りである。①今日の練習はどうでしたか、②どのようなことを考えながら練習していましたか、③感覚の変化はありましたか、④感情の変化はありましたか、⑤何か手応えは掴めましたか、⑥何か気づいたことはありますか、⑦意識はどういうところになりましたか、⑧集中力はどうでしたか、⑨今日の練習の感想をお願いします。

謝 辞

貴重なご指摘を数多く示して頂きました査読者の皆様並びに本研究への協力を快く御承諾いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

文 献

會田 宏 (2008) ハンドボールのシュート局面における個人戦術の実践知に関する質的研究：国際レベル

- で活躍したゴールキーパーとシューターの語りを手がかりに。体育学研究, 53 : 61-74.
- 會田 宏・坂井和明 (2008) 国際レベルで活躍したハンドボール選手における実践知の獲得過程に関する事例研究。武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学), 56 : 69-76.
- 浅井継悟 (2012) 日本における過剰適応研究の研究動向。東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60(2) : 283-294.
- 浅野友之・中込四郎 (2014) アスリートのコツ獲得におけるプロセスモデルの作成。スポーツ心理学研究, 41(1) : 35-50.
- 荒川 歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012) 複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例。立命館命館人間科学研究, 25 : 95-107.
- Beek P. J., and van Santvoord A. A. (1992) Learning the cascade juggling: A dynamical systems analysis. *Journal of Motor Behavior*, 24: 85-94.
- Burns, N and Grove, SK (2001) *The practice of nursing research*. 4th ed. W. B. Saunders Company. Philadelphia.
- Denzin, N. K (1978) *The research act*. McGraw-Hill.
- Denzin, N. K (1989b) *The research act* (3rd edn), Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- 橋詰 謙・松尾知之 (1998) Jugglingの初期学習過程—ball eventの変動性について—. 運動学習研究会報告集, Vol. 8 : 22-26.
- Hashizume, K., and Matsuo, T. (2004) Temporal and spatial factors reflecting performance improvement during learning three-ball cascade juggling. *Human Movement Science*, 23: 207-233.
- 波多野慈之・松田有司・實宝希祥・荒木雅信 (2013) 運動学習過程における視覚フィードバックの強度と役割について—ジャグリングを用いて—. 大阪体育大学紀要, 44 : 65-73.
- 廣瀬春次 (2012) 混合研究法の現在と未来。山口医学, 61(1) : 11-16.
- 石津憲一郎・安保英勇 (2008) 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響。教育心理学研究, 56(1) : 23-31.
- 伊藤順子・丸山愛子・山崎 晃 (1999) 幼児の自己制御認知タイプと向社会的行動との関連。教育心理学研究, 47 : 160-169.
- 川喜田二郎 (1967) 発想法—創造性開発のために—. 中公新書
- Kimchi, J, Polivka, B, Stevenson, J. (1991) Triangulation: operational definitions. *Nursing Research*, 40 (6) : 364-366.
- 北村晴郎 (1965) 適応の心理。誠信書房
- 北村勝朗 (2003) スポーツ・音楽・芸術領域における「わざ」習得過程の定性的分析による「教育情報」の解釈。教育情報学研究, 1 : 77-87.
- Koop, C. B. (1982) Antecedents of self-regulation: A developmental perspective. *Developmental Psychology*, 18: 199-214.
- 永山貴洋・北村勝朗 (2010) 動作のコツ習得過程にお

- ける身体知の働きの質的分析—高等学校女子バスケットボール選手を対象として—。教育情報学研究, 9 : 33-44.
- Nakagomi, S. and Kotani, K. (2009) Psychological meaning of athlete's experience acquiring Kotsu (knack or secret) in their Individuation process. ISSP 12th World Congress, 288.
- 西 泰信・岩井圭司 (2012) 準臨床的な一次性運動依存における心理的要因。体育学研究, 57(2) : 483-499.
- 大浦容子 (1995) 認知心理学から見た熟達化。新潟大学教育学部紀要, 人文・社会科学編, 36(2) : 229-243.
- 西條剛央 (2002) 生死の境界と『自然・天気・季節』の語り—『仮説継承型ライフストーリー研究』のモデル提示—. 質的心理学研究, 1 : 55-69.
- 西條剛央 (2007a) ライブ講義：質的研究とは何か—SCQRMベーシック篇—. 新曜社.
- 西條剛央 (2007b) ライブ講義：質的研究とは何か—SCQRMアドバンス篇—. 新曜社.
- 崎浜秀行 (2000) 自己調整 (self-regulation) に関する考察. (1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学, 48, p.65-72.
- 佐藤郁也 (2008) 質的データ分析法—原理・方法・実践—. 新曜社.
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン＝ヴァルシナー (2006) 複線径路・等至性モデル—人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して—. 質的心理学研究, 5 : 255-275.
- 澤田慶輔・古畑和孝 (1978) 人間科学としての心理学. サイエンス社.
- Scholz, J., Klein, M. C., Behrens, T. E., and Johansen-Berg, H. (2009) Training induces changes in white-matter architecture. Nature Neuroscience, 12 (11) : 1370-1371.
- Smith, J. A. (1995) Semi-structured interviewing and qualitative analysis. In: J. A. Smith, R. Harre, and L. van Langenhove (Eds.) Rethinking methods in psychology. Sage, pp.9-26.
- 田中浩二 (2010) 年長クラスにおける鬼ごっこの指導プロセス—M-GTAを用いた保育者へのインタビューデータの分析—. 教育心理学研究, 58 : 212-223.
- 田中彰吾・小河原慶太 (2010) 身体知の形成—ボールジャグリング学習過程の分析—. 人体科学, 19(1) : 69-82.
- Thorensen, C., and Mahoney, M. J. (1974) Behavioral self-control. Holt, Rinehart & Winson.
- 豊田則成・吉田政幸・志賀 充・高橋佳三・佐々木直基・望月 聡・植田 実・若古浩二 (2013) 学習方略としてのマインドマップの検討—自己調整学習理論に着目して—. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 10 : 113-119.
- 筒井真優美・太田有美・渡邊久美子・江本リナ・甲斐恭子・関根弘子・中村明子 (2005) 日本における研究手法の変遷—量的研究・質的研究・トライアンギュレーション—. インターナショナルナーシングレビュー, 28(2) : 37-46.
- ウヴェ・フリック：小田博志ほか訳 (2003) 質的研究入門. 春秋社.
- Valsiner, J. and Sato, T. (2006) Historically Structured Sampling (HSS) : How can psychology's methodology become tuned in to the reality of the historical nature of cultural psychology? In: J. Straub, C. Kolbl, D. Weidemann, and B. Zielke, (Eds.) Pursuit of meaning: Advances in cultural and cross-cultural psychology. Bielefeld Transcript Verlag, pp.215-251.
- 渡邊芳之 (2004) 質的研究における信頼性・妥当性のあり方 リアリティに至る過程. 無藤 隆ほか編 質的心理学 創造的に活用するコツ. 新曜社, pp.59-64.
- 安田裕子・サトウタツヤ (2012) TEMでわかる人生の径路 質的研究の新展開. 誠信書房.

(2014.11.4 受稿, 2015.3.5 受理)